10代の未遂者支援における現状、課題、現在の取組、今後の取組

資料3-①

	現状	課題	現在の取組	今後の取組
子ども	・気持ちに波がある。ＳＯＳを出せるときもあるが、一人の時間に思いがつまってしまうこともある。 ・言葉、手紙、リストカット等、色々なＳＯＳの出し方がある。 ・特性のある子どもは上手く気持ちを表現できない。 ・友達との付き合い方がわからない、友達から言われたことを受け流すことができない。 ・楽になる方法としてリストカット等の自傷行為を選択する。	・教職員や親など周囲の大人が**ＳＯＳをキャッチする力**が必要。 **・子どもの発達特性や思春期の子どもの気持ちを踏まえた対応**が必要。 **・子どもがＳＯＳを出す力を身に着け、自傷行為以外の選択肢をもつことができるよう、安心、信頼できる大人の関わりや経験**が必要。	・小学校や中学校でＳＯＳの出し方教育を実施 ・教職員が子どものＳＯＳをキャッチする力や指導力、実践力等を向上するため、研修を実施**➡令和４年８月、市内中学校にて教職員研修を実施**	【学校・教育委員会】 ・ＳＯＳの出し方教育の継続。ストレスマネージメントやアサーション（自分の気持ちの上手な伝え方）、相談することの必要性や大切さ、相談窓口について繰り返し伝えていく。 ・定期的な個別面談により、子どもの悩みや不安を確認していく。 【健康増進課・学校・教育委員会】 ・周囲の大人の支援力を強化するため、教職員研修を他校にも広めていく。
親	・子どもの自傷行為について、どう対応していいかわからない。 ・学校から子どものことで連絡があると、子育てが上手くできていないと責められたように感じる。 ・子育て以外にも仕事や介護などを抱えている。	・親も子どもや自身のこと、家庭のことなど悩みを抱えており、**親を理解した支援**が必要。	・ケース会議やリスクアセスメント会議にて、関係機関で情報共有や役割分担し、チームで支援	【各関係機関】 ・親が自身のことや子どもへの対応について相談できるよう、親支援の担当や相談窓口を確保する。 ・子どものしんどさや自傷行為等の背景を親に理解してもらうため、必要な情報提供や対応についての助言等、親への啓発を行う。
支援	・子どものＳＯＳに気づけるか不安 ・子どもへの対応がこれでよかったのか不安 ・医療の判断が欲しい ・学校が把握している情報は一部であり、家族や地域のことはわからない。（親子関係、夫婦関係、親の仕事や介護など、家庭で何が起こっているかまではわからない。） ・関係機関の支援内容や動きがわからないため、どんなつなぎ先があるのかわからない。	・多機関多職種の視点で家庭全体の状況を把握し、アセスメントし、役割分担をしながら支援できるよう、**支援者のネットワークづくりやネットワークの強化**が必要。	・ケース会議やリスクアセスメント会議にて関係機関で情報共有や役割分担し、チームで支援 ・自殺対策関係課会議、自殺対策推進会議の開催 **・令和４年８月、市内中学校にて教職員研修を実施** ・ゲートキーパー養成研修の開催 ・相談窓口リーフレットの作成、配布	【各関係機関】 ・個別ケースを通じて、支援者の顔の見える関係づくりや関係機関との連携強化を図る。 ・自殺対策関係課会議や自殺対策推進会議にて、関係機関がお互いの事業や取組について共有し、自殺対策における課題や取組を検討する。 【健康増進課・学校・教育委員会】 ・周囲の大人の支援力を強化するため、教職員研修を他校にも広めていく。 ・教育現場と行政、医療との連携強化のため、自殺対策担当課と児童生徒支援課にて、現状や課題を共有し、具体的な取組や解決策について検討する。 【健康増進課】 ・市民が身近な人のこころの不調に気づいて行動できるよう、また市職員や関係機関が相談窓口等で適切な対応ができるよう、ゲートキーパー養成研修を継続して行う。 ・自殺対策担当課にて未遂者支援（リスクアセスメント会議）の事業評価を行い、関係機関や支援者へフィードバックをする。

子どもがＳＯＳを出す力や周囲の大人がＳＯＳをキャッチする力、多機関多職種の視点で家庭全体の状況を把握することの重要性について、支援者の理解が深まることで、子どもや親支援の取組につながる。